

曾利遺跡

5000年前の暮らし間近に

富士見町教委が現地説明会



富士見町教育委員会は10日、同町池袋の井戸尻考古館周辺にある縄文時代中期約5000年前の曾利遺跡発掘現場で、現地説明会を開いた。午前と午後の2回行い、午前は地元住民や考古学ファンら約40人が参加。試掘溝の中に入って出土した土器を間近で見たり、遺構の説明を聞いたたりして、5000年前の生活に思いをはせた。

(飛矢崎貴規)

遺跡整備に向けて3年計画で行っている調査の最終年。5月上旬に発掘を始め、3本の試掘溝を掘って、縄文時代中期の住居址6軒、平安時代

の住居址1軒、完全な形の有孔罎付土器、おちよこ型の人面が施された香炉形土器などが見つかった。

調査を担当した学芸員の副島蔵人さんが解説を担当した。「火をたいて黒くなった土が住居部分」とし、中期後葉に見られる大きないろり、後期初頭の墓穴、地割れの痕跡から地震もあったのではなにかと説明。「1000年間 にわたる大集落であったことは間違いない。時期を下りながら、集落が南下していったと考えられる」と話した。

初めて参加した福山浩子さん「同町高森」は「こんなに深い穴があるとは思わなかったのが驚いた。暮らし方が分かって勉強になった」と興味深そうに話した。